

「夕べがあり、朝があった」

旧約 創世記 1章1節－13節

1、創世記1章1節。聖書の一番始めの言葉です。ここを読むと、どうしても思い出すお話があります。同志社大学を創設した新島襄は海外脱出の最中、この聖書の言葉に出合って、価値観を「軍事力」から「聖書(キリストへの信仰)」に転換しました。

2、キリスト教の信仰の中心は、神がイエスによって自らを「救いの主」として表されたという「キリスト論」にあります。が、「天地の造り主(創造者への信仰)」は、それより古くからの信仰です。初代教会の伝道も創造者を伝えることが中心でありました(使徒言行録14:15-17 p.241)。キリスト教の理解にはいろいろな面があります。キリスト論、贖罪論、教会論、人間論、終末論、創造論。創造論は最も古いものです。創世記のはじめの、ヤハウエ(J)資料(創2:4f)、祭司(P)資料(1:1f)の二つの資料に天地創造の物語があります。今日読んだ祭司資料は紀元前6世紀ごろまとめられたイスラエル民族の世界観と言ってもよいかと思えます。

3、今日は6日間で神が天地を創造された物語の区切りに6回記されている「夕べがあり、朝があった」というリフレイン(くりかえし)に注目したいと思います。神は天地を創造されると同時に繰り返しのリズムを創造された、という視点です。

4、私たちの生活で、朝・夕、春夏秋冬、というリズムは生活のにとって、とても大事です。「子供は9時まで寝かせて欲しい」とは、ある小児科医の切実な声でした。幼児はリズムの中で育つからです。

5、「光」と「闇」のリズムは、そうして6日の労働と7日めの神の安息が祝福され、聖別された(創2:3)という出来事を象徴するからです。教会は、これを象徴的に、あるいは日常的に繰り返すために日曜日に礼拝を持っています。これは、「神がイエスにおいて十字架の死を負い、罪の贖いの愛の実現を成し遂げ、それを安息日の朝の(マルコ16:11)復活に出来事で示した」という福音の内容を表しています。終日の労働と日曜の礼拝とは、福音そのものをしめす繰り返しだからです。いつぞやは、ギャザードチャーチ・スキタード・チャーチ(集められた教会・散らされた教会)という表現で表しました。その繰り返しのリズムが大事なのです。

6、三浦綾子さんの小説に「夕べがあり、朝があった」という作品があります。クリーニング店を創業した五十嵐健治の伝記小説です。人生を、信仰に生かされたリズムとして描いているところが読みどころであります。

7、パウロの「夜が更け、日が近づいた」(ロマ13:12)は、彼が創造物語を念頭においていたと思われまます。闇は闇のままではない。恵みのリズムがあって、新しい朝へと必ずむかわしめられる。「うるわしき朝も、静かなる夜も・・・」の子供賛美歌のように、神のリズムのなかに生かされていることを忘れまい。私も少年の日、農村教会で与えられた恵みは「神のリズム」に要約されるような気がしています。